

平成25年度

中学入試（1回）

国語試験

注意事項

試験開始のチャイムが鳴るまで勝手にあけてはいけません。

1. チャイムが鳴ったら、ページ数(14ページあります)を確認しなさい。
2. どの問題からやってもかまいません。
3. 解答はすべて別紙の解答らんに書きなさい。

号 室		番 号		氏 名	
--------	--	--------	--	--------	--

一 次の①～⑤の [] に当てはまる言葉を後の語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 大きな岩を [] 砕^{さい}する。
② [] 私を混同する。
③ あの大どろぼうも [] 心したらしい。
④ 米やトウモロコシ、麦などを、[] 物と呼ぶ。
⑤ 事故を未 [] に防ぐことができた。

《語群》

カイ コウ コク ゼン フン

二 次の①～⑤の [] に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① 両親は旅館を [] んでいる。
② 誕生日を盛大に [] う。
③ 猫^{ねこ}の [] ほどのせまい庭。
④ 選手団を [] いて入場する。
⑤ 暑さ寒さも彼^ひ [] まで。

三 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

日本人が一日三回、食事をするようになったのは、三百年ぐらい前からのことでした。それ以前は、^①どうしていたのでしょうか。大昔、人間は、おながが空^すいたら食べるという生活をしていました。しかし、いつも食べ物があるわけではありません。獲^え物がとれずに、空腹に苦しんだことも多かったことでしょう。

日本では、一万年ぐらい前の縄^{じょうもん}文時代になると、木の実などをたくさん食べるようになり、食生活が豊かになりました。土器と火を使つて料理をして、家族などが集まつて食事するようになりました。そのために、おながが空いたら食べるのではなく、みんないっしょに、ある程度、規則正しく食事をしたようです。でも、一日何食だったかは、わかっていません。

およそ千三百年前の奈良時代になると、都の平城京(現在の奈良県)の住民たちは、一日二食がふつうでした。朝食と夕食の二食で、夕食は暗くなる前に食べていたようです。一般^{いっぱん}の人びとは、玄米^{げんまい}やあわなどの主食に、野菜の汁^{じゅう}もの、それに塩といった、かんたんな食事でした。いっぽう、貴族は焼き魚や、かも肉の汁ものなど、何皿ものおかずがあるぜいたくな食事をしていました。

^③それから、千年の間は、一日二食の習慣が続きました。

でも、二食では、おながが空いて、困ることはなかったのでしょうか。

実は、昔の人も困ったのです。特に、農作業や工事などで、激しい労働をするときは困りました。そんなときは仕事を中断して、かんたんな食事をとりました。^④これを「間食^{かんじき}」や「中食^{なかじき}」といいます。

はじめのころは、間食を食べることは、はずかしいこと、悪いことだと考える人もいました。

千年前の平安時代の清少納言という女性歌人は、大工が間食を食べている様子を「あんなふうに物を食べるなんて、ねこのようだわ。あつてはならないわ」と、「枕草子^{まくらのそうし}」という有名な書物に書きのこしています。でも、^⑤気位の高い清少納言のことですから、もしかしたら、

やせがまんだったかもしれません。

やがて、天皇をはじめ身分の高い貴族たちが「間食」をとることが当たり前になっていきました。八百年ぐらいの前の朝廷は、朝夕の二食から朝昼夜の三食に変わったと記録されています。

ただし、武士や一般の人びとは一日二食の暮らしを続けていました。「間食」が、「昼飯」とよばれる、ふつうの食事になり、だれにとっても、一日三食が当たり前になったのは、三百年前の江戸時代中ごろのことでした。

⑥なぜ、二食から三食に変わったのでしょうか。

その理由の一つは、農業や漁業が発展し、食べ物が豊富になったことにあります。でも、理由はそれだけではありません。

人びとの働く時間がぐんと長くなったのです。それまでは、日が暮れるとすぐになる人が多かったのに、江戸時代は、明かりをつけて、夜も起きている時間が長くなってきました。どうやら、夜明けとともに起きだして、夜は午後十時ぐらいいまで起きていたようです。

こうなると、二食だけではおながが空いて、たまりません。

人びとは弁当を持参するなどして昼飯を食べ、夕飯は、日が暮れて明かりがとるところに食べるようになりました。

一日三食が、日本人の習慣になりました。

(三田大樹監修「なぜ? どうして? 身近なきもん 6年生」)

※抜き出し問題では、句読点などの記号は字数として数えないものとします。

問一——線部①〈それ以前は、どうしていたのでしょうか〉について。

I 日本人が一日三回食事をするようになったのは、いつの時代からですか。5字以上10字以内の本文中の言葉を抜き出すことで答えなさい。

II 筆者は、これ以降、一般的な日本人の食事の移り変わりを、大きく四つの段階に分けて説明しています。では、三つ目の段階について述べられているのはどの段落ですか。本文中からその段落の最初の3字を抜き出すことで答えなさい。

問二——線部②〈都の平城京(現在の奈良県)の住民たちは、一日二食がふつうでした〉とありますが、当時も一日二食でない場合があります。それはどのようなときですか。5字以上10字以内の本文中の言葉を抜き出すことで答えなさい。

問三——線部③〈それから、千年の間は、一日二食の習慣が続きました〉とありますが、すべての人々がその習慣に従っていたわけではありません。その習慣から外れて一日三食を食べることが当たり前になっていたのは、どのような人々ですか。本文中の言葉を用い、16字以上20字以内で答えなさい。

問四——線部④〈これ〉の指す内容を、本文中の言葉を用い、15字以上20字以内で答えなさい。

問五 ―線部⑤〈気位〉の読みを、ひらがなで答えなさい。

問六 ―線部⑥へなぜ、二食から三食に変わったのでしょうかとありますが、その理由を30字以上35字以内で説明しなさい。

問七 に当てはまる最も適当な言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア こうして イ したがって ウ その結果 エ つまり

問八 この文章の説明として正しいもの、不正なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 記録や引用を用い、推測もまじえて当時の状況を想像させている。
イ くりかえし問いを立て、それに答える形で文章を進めている。
ウ 時代の移り変わりに沿い、それがもたらす変化とその原因を説明している。
エ 対立する考え方を示し、それらを比べながら結論を導いている。

四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

長崎県の離島に暮らす桑原サトルは、中学三年生になって合唱部に入り、NHK全国学校音楽コンクールの長崎県大会に出場しました。
今、課題曲「手紙」^①を歌い始めたところです。

第一声が、外れたり、おおきすぎたりしませんように。それがすぎると、あとは夢中で指揮者についていく。自分がこんな場所で合唱しているなんて不思議な気がした。数年前の自分は想像でできたのだろうか。自分がだれかといっしょに歌っているだなんて。一生、ぼつち状態がつづくのだとおもっていたのに。

辻エリの手の動きは、しっかりと見えていた。全体の声や、周囲の人の声も、耳に入ってくる。自分の声が男声パート全員の声に溶けあう。その音がほかのパートの声と絡み合^あって音楽そのものになる。

懸命に歌っている自分と、それを俯瞰^{はんぱん}してながめている自分が同時に存在した。課題曲を歌うと、宿題で書いた手紙のことをおもいだす。それを読んでしまった長谷川コトミの表情は今でも目に焼き付いていた。おどろきとも、あわれみともつかない、複雑な顔だった。見えてはいけないものを見てしまった、
 ①
という、そんな後悔の表情だ。他人に見せるつもりがなかった手紙

には、だれにも言うつもりがなかったことを書いていた。兄と自分、そして将来のことを……。

拝啓 十五年後の自分へ。

いつも一人ですごしていました。

友だちが、できませんでした。

〈注〉 1 ぼつち状態 ―ひとりぼつちでいること。 2 俯瞰 ―上から見下ろしながめること。

このコミュニケーション障害は、何が原因なのでしょう。

無意識のうちに、相手を避けていたのかもしれませんが。

自分は決定的にみんなとはちがうのだ、という自覚が昔からありました。

自分のことが、人間の村に入りこんだモンスターのようにおもえるのです。

クラスメイトに話しかけられたとしても、どこかで線をひいて、距離をおいてしまうのです。

だれともうまく意思疎通のできない、だれからも興味を持たれない、そういう人間に、なってしまいました。

でも、それは好都合です。

そうなった反動で、僕には兄しかのこされていない、という意識が心のどこかにありました。

兄には人一倍、感謝しています。

兄が自閉症でなかったら、僕は、生まれてこなかったのですから。

両親は、子どもを一人しか作らない予定でした。

兄が自閉症だとわかるまでは。

将来、兄だけが取りのこされたとき、一人での生活が困難になるだろうとおもわれて、両親は決意したのです。

自分たちが死んだ後、兄を世話してくれる弟か妹を作ろうと。

そして僕が、この世に生まれてきたのです。

もしも、兄がふつうの子だったら、僕はこの世にいなかったでしょう。

〈注 3 自閉症——他者とのコミュニケーション能力に困難が生じる発達障害の一種。〉

父が僕に言い聞かせていたことを、あなたは守っていますか？

兄の世話をしながら、工場でがんばっていますか？

兄弟でやとってくれる親戚に感謝をわすれていませんか？

僕は今、将来に対する不安がありません。

自分の存在している理由が、はっきりとわかっているから。

教室で、だれからも相手にされなくても、割合に平気でいられました。

兄のことを心のよりどころにして、僕は自分をたもっていたのです。

自分には使命がある、存在する意味がある。

生まれてきた意味がある。

兄といっしょに工場通いをして生きるのだと。

確定した未来が僕にはあるのだと。

そうするために、十五年前、僕は母のおなかに宿されたのですから。

自分の人生は決まっています。

僕の創造主でもある父の意思のままに。

でも、たまに、みんなのことがうらやましくなるのです。

生きている理由を、これから発見するため、島を出て行くみんなのことが。

僕の出生のように、計算ではなく、純粋な愛情によって生まれてきたみんなのことが。

両親の愛情をうたがっているわけではないのですが、たまに元気のないとき、^③そうかんがえてしまいます。

長谷川さんに、僕は嘘をついてしまいました。

自分に兄弟はいない、一人っ子だと。

咄嗟に兄のことを伏せてしまったのは、自分のなかにも、どこかしら、兄を疎ましくおもうところがあったのではないか。

兄がいなければ、もっと自由に生きられるのに、というおもいがあったのではないか。

信じたくないけれど……。

たとえ、そうだとしても、最後には兄のそばに寄り添うでしょう。

愛情も、憎しみも、何もかもすべて受け入れて、それでもいつしよに生きるでしょう。

僕たちは家族ですから。

選考結果が発表され、総評が選考委員の方から述べられる。残念ながら僕たちは九州大会に進むことができなかった。その後、ホール内にいた全員で課題曲を合唱し、Nコン長崎県大会は幕を閉じた。

諫早文化会館の外に出ると、大勢の生徒たちが記念写真をとっていた。全員、その場を立ち去るのが惜しいのだろう。僕たちもすぐにはバスへもどらずに、すこしだけ外をぶらついた。先生方の決めた集合時間まで余裕がある。教頭先生の持っていたカメラで記念写真を撮影した後、後輩の女子部員が駆けよってきて「桑原先輩、いっしょに写真を撮ってもいいですか？」と声をかけられる。動揺しながら

うなずくと、後輩は僕の隣にならんで諫早文化会館を背景に携帯電話で自分撮りをした。

「サトル！」

一人で正面玄関のあたりをうろついていたとき、呼びとめられる。ふりかえると、父母と兄が人込みのなかで立っていた。

「合唱、すごかったはい。あんた、緊張したやろ。大勢の前で、がんばったねえ」

母が興奮気味に話す。

「緊張したけど、一人じゃなかったけん、だいじょうぶやったよ」

父もまた、ディスプレイで合唱を見てくれていたようだ。

「会場に入れんで残念やったね」

「別によか。俺らはもう帰るぞ。おまえはバスでもどつとか？」

「うん。夜にはもどるけん」

兄がどこことなく、そわそわしていた。トイレに行きたいらしい。

「二人はここにおつて。兄ちゃんばトイレにつれてくけん」

両親をその場に待たせ、兄の肘に手をそえてあるきだす。身内の応援がおわって立ち話をしている人や、顔を寄せあつて携帯電話のカメラに笑顔を見せている生徒で、どこも混雑している。カメラのフラッシュが瞬くたびに、兄がびくりと肩をふるわせる。

大ホール周辺は人がおおいため、奥まったところにある中ホール前のトイレへ連れていくことにした。予想通りそちらの方は人がすくなく、閑散としている。^④あたりがしずかになると、背後からついてくる足音に気づいた。後方のすこしはなれたところに長谷川コトミがいた。

「あ、気づかれた」

「なんばしょっと？」

「桑原くんは見かけたけん、観察しよったと。そちらは、お兄さん？」

「うん。僕の兄ちゃんばい」

長谷川コトミは、兄に会釈する。

「どうも、長谷川です」

兄は無反応だ。彼女なんて存在しないかのように目をあわせない。でも、会話はすべて聞こえているし、テープレコーダーのように記憶しているはずだ。

ひとまず僕たちは男子トイレにむかう。長谷川コトミを外で待たせて、兄は一人で大の個室に入って扉を閉めた。兄が出てくるのを、トイレの外で待つ間、長谷川コトミと立ち話をする。

「今日はおつかれさま」

「うん、そっちょこそ」

「やっぱり、あの人が桑原くんのお兄さんやったとね。そうかもしれんって、おもったよ」

長谷川コトミは僕の書いた手紙を読んでいたから、兄が自閉症であることをしっている。

「ホールを出たところに、ずっとすわっとったよね」

「兄ちゃん、目立ってった？」

「中に入れてもらえんとかなくて、心配しとったさ」

「自肅したとよ、うちの親が」

僕たちは壁によりかかってならんでいた。中ホール前の通路には、駐車場側に通じるガラス扉がある。外の明るい日差しにくらべて、

僕たちのいる通路はうす暗い。

「さっき、桑原くんのお父さんとお母さんも見たばい。手紙に書いとったよね。自分が生まれたのは、計算によるものだったんじゃないかって」

手紙のことが話題に出るのは、はじめてだ。

「うん、書いとった」

「ぜーんぜん、そがん風には見えんやったよ。お父さんも、お母さんも、桑原くんのことば、やさしい目で見とったよ」

「そうね。ありがとう」

お礼を言ったけれど、2 から出たのではない。儀礼的なものだったとおもう。それが彼女に伝わってしまったのかもしれない。

「桑原くんは、わかつとらん。だって、桑原くんは、桑原くんやけん。どういう風に生まれてきたかは関係なかよ。桑原くんが今ここにいることに、ただ感謝すればよかとよ。十五年前、とにかく桑原くんは、生まれたとやけんね」

「わ、わかった……」

この後、兄がトイレから出てきて二人の会話は終わり、三人はサトルの両親のところへもどりました。

(中田永「くちびるに歌を」より。作問の関係上、一部省略があります。)

問一——線部①「不思議な気がした」では、自分が大きく変わったことをサトル自身が「不思議」に感じています。ではサトルは自分が何によってどう変わったと思っているのですか。以前の自分の状態も明らかにして、40字以内で答えなさい。

問二——1に当てはまることばを「手紙」の内容をよく読んで次から選び、記号で答えなさい。

- ア 関わりたくもない面倒に巻き込まれてしまった
イ そして、他人の失敗をおもしろがってしまった
ウ 他人の人生に自分は深く入りこんでしまった
エ 自分に好意を持っていることを知らない方がよかった

問三——線部②「他人に見せるつもりがなかった手紙には、だれにも言うつもりがなかったことを書いていた。兄と自分、そして将来のことを……」について。兄と自分の将来を前向きに受け入れて生きていこうというサトルの思いを、「手紙」の中の言葉を使って40字以内で答えなさい。

問四——線部③「そうかんがえてしまいます」と言うときのサトルの気持ちを言い表している言葉を、本文中から抜き出して答えなさい。

問五——線部④「閑散」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 落ち着かないさま イ ひっそりしているさま ウ ゆったりしているさま エ さびしげなさま

問六——線部⑤「あたりがしずかになると、背後からついてくる足音に気づいた。後方のすこしはなれたところに長谷川コトミがいた」について。彼女がこのような行動をとったのはなぜですか。その理由として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 兄の世話をしなくてはならないサトルを元気づけたかったから。
イ サトルに自分の将来の夢を聞いてほしかったから。
ウ ホールに入れてもらえなかったサトルの兄が心配だったから。
エ 自分らしく生きれば良いとサトルに伝えたかったから。

問七——2に当てはまる言葉を次から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 本心 イ 思いやり ウ 好意 エ 心づかい

平成二十五年
度
中
学
入
試
回
1

2

受 験 番 号

①	
②	
③	
④	
⑤	

①	
②	
③	
④	
⑤	

問

II

1000

問一

問三

問四

問五

問六

問七

問八

30

問

問二

問三

問四

問五

問六

問七



号 室	
受験番号	
氏 名	

受験番号は解答用紙の右のらんにも記入しなさい。